

山口女子大 家政 ○本田テル子 西宮和江

(目的) 食事内容に影響を及ぼす因子は多く、世帯間の食事に共通性を見出すことは困難である。しかし既報で明らかにしたように、食事を食形態の面からみると、三食の中で、朝食が主食パターン別副食に最も共通性が見出された。今回は類似した生活環境下における世帯間では、食生活にも何らかの類似性が見出されるのではないだろうか。その実態を明らかにする目的で調査をおこなった。

(対象及び方法) 対象は岩国市に立地する某石油化学工場勤務者のうち会社社宅に在住する247世帯である。調査内容は食生活に関するアンケート及び3日間の食事調査である。食事については、摂取される食品及び調理方法が季節の影響を受けやすいと思われるので、四季に調査をおこなった。調査用紙の配布方法は、会社の衛生管理室を通して配布、回収した。第1回の調査時期は、昭和55年7月末～8月上旬である。第1報は食生活に関するアンケート調査を中心に報告する。

(結果) 1、生活環境：世帯主の勤務態様は、常勤勤務者74.5%、交替勤務者25.5%である。世帯主の平均年齢34.0才、主婦の平均年齢31.5才である。平均家族人数は3.5人である。

2、献立：献立を決める因子としては嗜好が最も重要視され約60%を占め、次いで栄養が多い。三食の中では、夕食が重要視されている。

3、調理：食事作りをする人は、三食とも99%が主婦である。調理の所要時間は、朝食では平均31.5分、昼食は平均27.9分、夕食は平均82.3分である。